

Title	イノベーション交流分科会実績と新たな潮流
Author(s)	旭岡, 叡峻
Citation	年次学術大会講演要旨集, 30: 639-642
Issue Date	2015-10-10
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/13358
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

イノベーション交流分科会実績と新たな潮流

旭岡叡峻
((株) 社会インフラ研究センター)

はじめに

1. イノベーションの現状 (実績も踏まえて)
2. イノベーション構造の相違
3. 新たなイノベーションの展開
4. 今後の展開

最後に

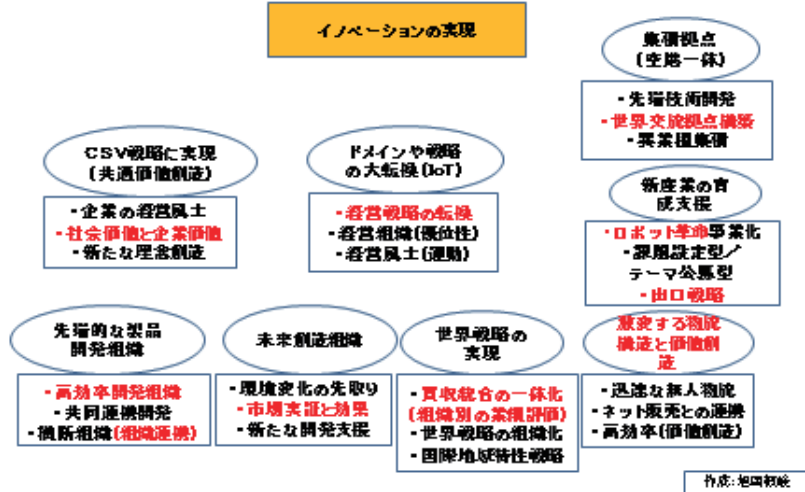
はじめに

イノベーションは、今劇的な変化を遂げつつある。

その要因は、1. 価値創造 (社会価値と企業価値) の提供競争、2. 新たな事業モデル (発想) や技術開発の広範な展開、3. 開発から実装への迅速化、4. 事業展開の必要条件の見極めと引き抜き、5. トップ経営者の未来を見抜く構想力等が競争条件の形成や業績に対して大きなキーになっている。

1. イノベーションの現状 (実績も踏まえて)
いくつかの実績を見ると、イノベーションの狙いは異なる (参考1)

参考1: その意味は、



2. イノベーション構造の相違

これらを踏まえて、イノベーションの構造を見てみると (日米比較等)

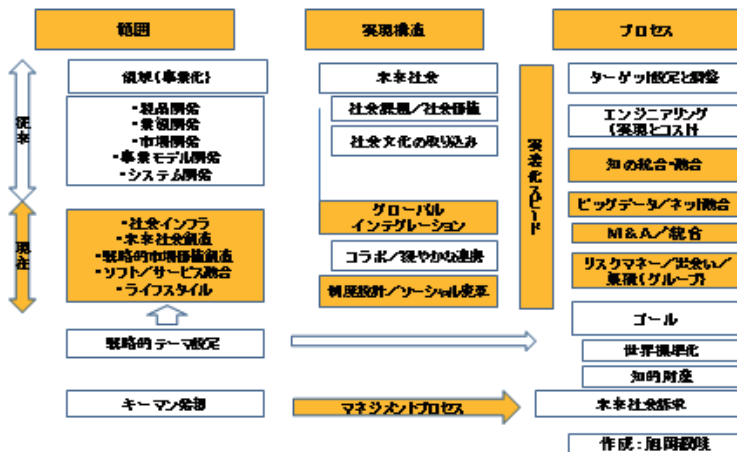
①イノベーションを担う主体、構想、開発方法、実装化、資源配置、仕組み、リスクへの対応等さまざまな要素での相違や展開方法の違いがある。

(今後のイノベーションは、先導 (官民連携)、計画、実行段階のマネジメントの相違) → 構造の違いから産業創造の違いを克服する必要がある。

②イノベーションの範囲が、社会インフラやソフト/サービスへの範囲に変化しており、未来社会/社会価値を展望した展開が重要で、また知の統合/融合、データの分析、

リスクマネー等の資金投資等のイノベーションマネジメントプロセスを体系的に実現する構想計画と実行プログラムが一層強化されなければならない。
 →未来社会実現志向、実装スピード、実現のデータ分析、知の統合の要素が加味されたマネジメントプロセスへ

参考2:イノベーションの構造
 (これまでのイノベーションとは異なる) 旭陽毅作成



3. 新たなイノベーションの展開

新たなイノベーションの展開は、

1) 業界特性や事業特性によって、イノベーションの展開はかなり異なる。

しかし、新たなイノベーションは、事業目標—その実現の開発—生産—市場開発—販売—サービスを体系的に革新するための、新たな要素が重要になっている。

- ① I o T等のネットワークの深耕と「ものや価値」の結合
- ②新たなツールの実装の多様化
- ③人と機械の連携（ロボット、人工知能）
- ④社会インフラ（含制度改革）の浸透
- ⑤これまでの技術に、再生医療、脳科学の知見の融合知の応用
 →イノベーションの駆動要素は拡大

2) それに伴うものづくり（分析的なものづくりからシンセシスを重視する価値づくりへ）

→価値機能づくり等の生産革命

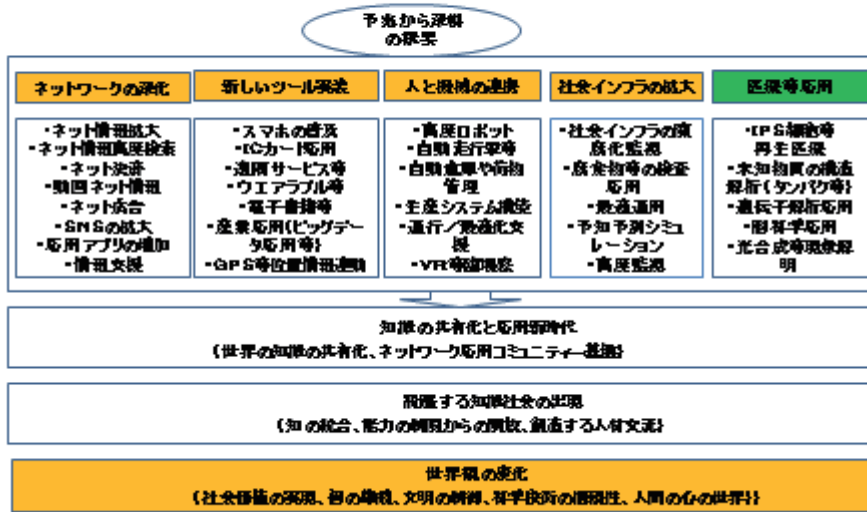
3) 社会価値／顧客価値を形成するための技術／ソフトの高度化の応用

（戦略機能実現、データ分析による未知の世界の可視化、人工知能等の圧倒的なアルゴリズム応用等の活用の優位性獲得することが未来社会を創造する）

→「戦略機能」が今後の価値創造

等で、展開の視点は大きく異なる。

参考3: 変化の予兆と今後の世界観



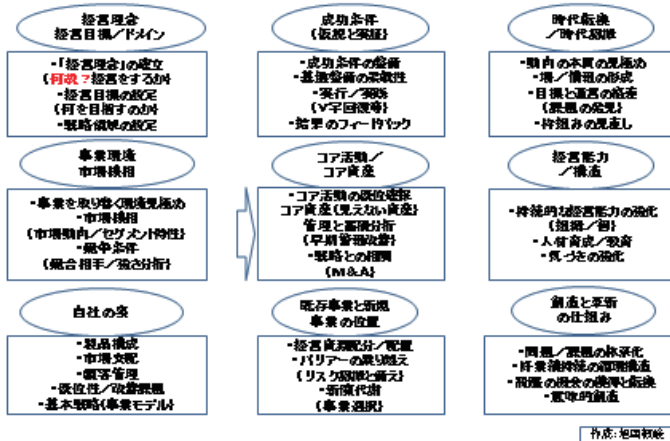
4. 今後の展開

イノベーションは、

- 1) 多くの経営要素の体系的な変化要因の形成プロセスであり
(→事業の内容によるが、体系的なイノベーション構造を形成する)

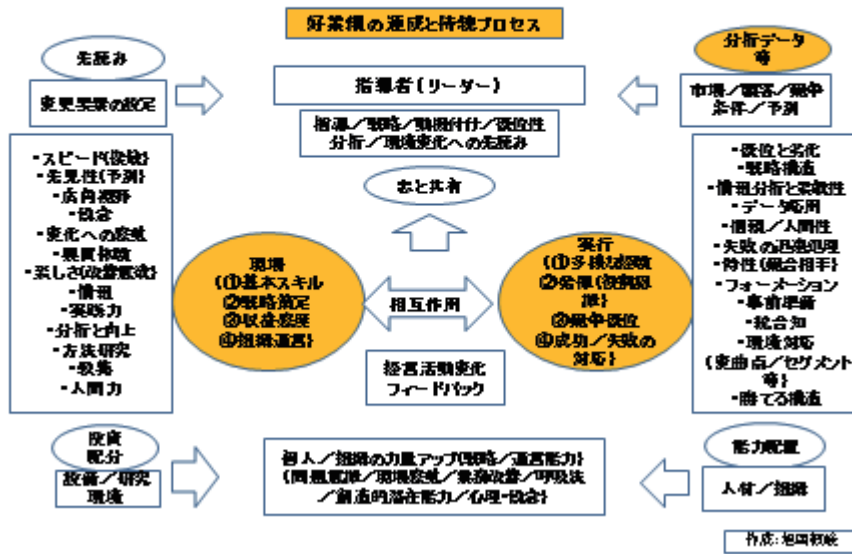
参考4: 企業/事業への応用
(イノベーションは体系的な経営実現の必要)

(旭岡開発)



- 2) 目的志向の知の集積と知のツールの獲得
- 3) 実現のためには世界中からの必要能力と人材の活用
→既存組織ではなく「必要構造」の構成 (THE POWER of PULL)
- 4) 組織的な創造や創造性の組織的仕組み
- 5) 勝ち続ける経営の構築 (C I V M) の完成
イノベーションを一過性ではなく、持続的に実現するための構造を (C I V M) を構築することが、今後の企業戦略にとっては、不可欠の要素となる。

参考5:要素体系(企業)
 ~CIVM(持続的イノベーションバリューマネジメント)



6. 顧客にハード+ソフト+サービスの組み合わせで顧客に提供
7. 内部メカニズムと外部メカニズムの連携
8. 日本経営の課題の克服

参考6:日本経営の違和感(2015-7-10現在)

〇世界の事業環境変化に対応して、「日本経営への違和感」が存在する。



最後に

イノベーションは新たな段階に入った。

我が国の「積み上げイノベーション」「線形思考型イノベーション」「管理型イノベーション」は大きな転換点を迎える。

国際競争に打ち勝ち「新たなイノベーションの新時代」先駆的な構造や仕組みに迅速に取り込む時代に突入している。